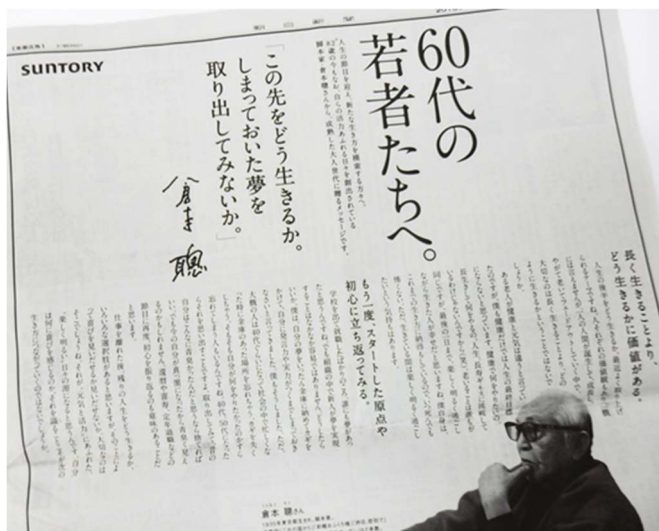


## 「60代の若者たちへ」

先日、大手飲料メーカー・サントリーの新聞広告が目にとまりました。ページいっぱい大きな文字で「60代の若者たちへ」のタイトルに続き「この先をどう生きるか。しまっておいた夢を取り出してみないか」と倉本聰氏が呼びかけています。とても刺激的なタイトルですよ。

「本や映画はタイトルが勝負」と昨年10月の本欄で「90歳。何がめでたい」の佐藤愛子氏の著書を例に少しばかりの論評を加えましたが、同様の反響が起こりつつあるようです。ネット上にはさまざまな共感の声が綴られていますので、その一部を紹介してみましょう。（ページの都合上、一部カットして手を加えています）



僕は、自分の夢をいったん金庫に納めてカギをかけて、自分に発言力や実力がつくまでしまっておきなさいと言ってきました。僕もそうしました。ただ、大概の人は40代ぐらいになって社会の中で忙しくなった時に金庫のあった場所を忘れちゃう、カギを失くしちゃう。そもそも自分が何をやりたかったのかすら忘れてしまう人もいますね。40代、50代になったらそれを思い出すことですよ。取り出してみ、昔の自分はこんなに青臭

かったんだと思うなら捨てればいい。でも今の自分が真っ黒になったから青臭く見えるのかもしれませんが。還暦や喜寿、定年退職などの節目に再度、初心を振り返るのも意味のあることだと思います。（本文中から）

＜声1＞先日、日経新聞のサントリーの広告で倉本聰氏のエッセイを読みました。「60代の若者たちへ」というタイトルの文章は定年後にどう生きるか？を問いかけるものでした。人は誰もが年をとり、老いるものですが、80歳を過ぎててもイキイキしている人がいます。倉本聰氏も82歳とは思えぬほど精力的に動かれています。最後の1日まで楽しく明るく過ごすという倉本氏の人生観が彼に幸せを運んでいるのです。自分の心構えを変えれば、人生の後半戦を楽しむことができますから、もう一度自分との対話の時間を持って、自分の夢を再確認してみましょう。

**もう一度、原点や初心に立ち返ってみる。**

＜声2＞若い頃は誰もが夢を見たはずですが。しかし、社会人になり、組織に所属すると時間を取れなくなり、夢を実現できなくなります。多くの人はそのうちに自分の夢を忘れてしまいますが、これはとてももったいないことです。ミドル世代になったら、若かった頃の夢を再度思い出してみると

よいでしょう。もう一度学生時代に戻って、本当に自分が何をやりたいかを考えてみるのです。人生 100 年時代においては 60 歳も若者なのです。何かをはじめのに遅いということはないはずです。60 歳は人生 100 年時代には昔の 30 代、40 代のようなもので、ここからでも夢を実現できます。自分のやりたいことをリストアップし、そのための行動を起こしましょう。自分のためにアクションすることでワクワクした時間を過ごせます。楽しい時間を過ごすことで、人生の後半戦を幸せなものに変えられます。

＜声3＞今回、倉本氏のエッセイを読んで、55 歳などはまだまだ青二才だと思えるようになり、やる気をチャージできました。

＜声4＞人生の節目を迎え、新たな生き方を模索する方へ。

82歳の今もなお、自らの活力あふれる日々を創出されている脚本家の、倉本聰さんから、成熟した大人世代に送るメッセージです。

「この先どう生きるか。しまっておいた夢を取り出してみないか。」

- ① 長く生きる事より、どう生きるかに価値がある。
- ② もう一度、スタートした原点に立ち返ってみる。

シルバー世代にとって「今後の生き方に悩みや不安」をお持ちの方に贈る言葉として素晴らしい。



リラックスした大学の教室の授業風景

その意味では、定年はゴールではなく、豊かな可能性をはらんだ次の人生のスタートラインともいえよう」。

そして「あとがき」では「夢が、志が人を創る。大きな夢と志は大きな人生を創る」と呼びかけました。あれからたった 17 年で「人生 80 年」から「人生 100 年」と呼ばれる時代になりました。あまりの長寿化時代に老後をどう生きていくかが問われています。

「しまっておいた夢」でなく「今つくった夢」でも OK。その夢の一つに私は熟年留学をお勧めします。人生が大きく変わり未来が開かれてきます。

私は定年になってスペインに留学し素晴らしく充実した 1 年を過ごすことができました。その時の著書「定年留学してみませんか——60 歳からのアクティブ・ライフのすゝめ——」のまえがきに綴っています。「世界で最長寿国の日本。人生 80 年の時代である。平均でもまだ 20 年の人生が前途に横たわっている。



世界から集った若い仲間たちと